

## 『民間人保護の倫理』書評への応答

眞 嶋 俊 造

多くの場合、書評は一方的なものであり、著者に応答する機会が与えられることは稀である。まずは、拙著の論評をしていただいた評者に、また論評について応答する貴重な機会を設けていただいた『社会と倫理』編集担当者にお礼を申し上げたい。以下の応答が、読み手を介して評者との双方向的な議論を提供し、相互理解を深めることに資するものとしたら幸いである。

さて、多くの点において拙著の至らぬ点を喝破するような論者の炯眼に感服するとともに、また時として厳しい批判を賜うることができ非常にありがたく思う。それと同時に、拙著ではカバーしきれなかった、または伝えきれなかった論点があることを改めて思い知らされた。特に、書評を読んで「戦争」概念の難しさを痛感した。著者と評者を含む人々が抱く「戦争」のイメージは、それぞれが思い描く「戦争」観を規定するだけではなく、「戦争」をどう捉えるかにおいて決定的な役割を果たす。「戦争」のイメージが多様であり、また時として人々の間でイメージが異なるということは、「戦争」観

のみならず、「戦争」というものの認識の相違を生じさせる可能性を秘めている。論者と筆者がそれぞれ念頭に置く「戦争」のイメージにも差異があるように思われる。

ある武力紛争のスナップショットが論評の中で引用されているが、この引用から我々はある特定のイメージ（それらは我々の間で異なっているかもしれないが）を抱く。では、次のもうひとつのスナップショットはどのようなイメージを与えるだろうか。

内陸の農業地帯で生まれ育ち、それまで一度も国外に出たり親元から離れたりした経験のないハイスクールを卒業したばかりの19歳の新年兵が、自分に似た境遇の多くの僚友と共に、数千マイルも離れた地球の裏側のどこかにあるという、それまで名前すら聞いたことがなかった国に送られた。基地には朝昼なく迫撃砲が撃ち込まれ、毎日のように自爆攻撃やIEDで僚友が死傷している。衛星電話越しで友人のゴシップとテレビドラマの話しかしない郷里のガールフレンドは、こことは違う日常を生きているようだ。ある晩、基地の警備にあたっていると、遠くから猛スピードで乗用車が向かってくる。止まるように叫んでも車のスピードは落ちない。銃声——隣にいた僚友が発砲。それが合図となり、警備

にあたっていた全員が一斉に車に向かって射撃を開始した。弾が尽きると同時に、車はゆっくりと停まった。注意深く後部ドアを開けると、座席には血まみれになった臨月の妊婦が横たわっていた。彼女は分娩のために急いで病院に向かうところであった。

このスナップショットにどのような戦争のイメージを持ったのだろうか。これら2つの異なるスナップショットが（「戦争は残酷」といったイメージを除けば）必ずしも同じイメージを与えようとは限らない。ここで指摘したいことは、「戦争」を考え、また論じる際には、どの立場からどのような「戦争」を語るかについて自覚的になることが、コミュニケーションの前提になるだろう。

さて、いくつかの点で著者の立場を明確し、応答を行いたい。ひとつは、拙著が「現場で最も深刻な倫理的問題を迂回している」という指摘についてである。確かに、その「ジェノサイドの混乱した状況で現場の司令官はどうするべきか」という問いについての「現場における実践的な対処法」としての解決策を提示しなかった。しかし、著者は、論者のいう「現場で最も深刻な倫理的問題」について答えを出す意図を持っていないし、できないし、すべきではないと考えている。倫理学の第一義的な仕事は、問

題の所在を同定し、整理することであり、拙著においてはこの目的が一応は達成されたと考えられる。多くの倫理学者は、(応用)倫理学者が「現場」において具体的な問題解決を指示・指令を行うことはほぼ不可能であること、また、「現場」での実践的な対処法や解決策について「上から目線」で説教する意味はないし、そうすべきではないことを自覚しているだろう。ひょっとしたら、そうすることは倫理学者としての越権であり、傲慢であり、不遜ですらあるかもしれない。何らかの極めて特殊で例外的な場合(例えば、「現場」の司令官が過去に主要な研究大学院大学で規範倫理学理論を専門として博士号を取得している)を除いて、倫理学者が「現場」での問題解決に直結することはほとんどないだろう。当然ながら、たとえそのような例外であっても、その司令官は必ずしも倫理学者として判断や言動を行うのではなく、倫理学的素養を判断や決定のための考える糧とし、それを前提としつつもあくまでも軍事専門職業人として行動するだろう。実践にかかわる倫理学の貢献は、「現場」で起こる問題に具体的な対処法や解決策を提示することではなく、問題を整理することにあるといえる。

倫理学を学びたての学生は、「答えは何ですか?」というように「正解」(それは往々にして「唯一かつ具体的で普遍的」として考えられ

がちなもの)に飛びつきたくなる傾向がある。あたかも、数学においてそれに辿り着くことができるかのように、倫理学を学ぶと倫理的な「唯一のかつ具体的に普遍的な正解」が得られることができるかのように。もちろん、倫理学においてこういった「正解」を求めることが常に間違っているとはいえないが、常にそのような「正解」があり、それを求めるといふ行動様式をとることは、倫理学という学問における固有の特性——つまり、道徳判断やその理由づけにおける多元性を否定しないこと——を見過ごしていることになる。

もうひとつは、「紙の上で戦争を論じ、紙の上でしか通用しない議論はそろそろ終わりにしなくてはいけない」という主張に対して応答したい。著者が疑問に思うことは、果たして論者はどのような「議論」を代替と考えているのだろうかということである。残念ながら少なくとも私には論評においてその素描すら見出すことができなかった。しかし、もしその主張が戦争と平和の倫理を研究する倫理学者への批判だとするならば、それは必ずしも説得力のあるものではないように思われる。基本的に倫理学者の学術的活動は、抽象的な思考を机上で行い、それを記述し、議論を組み立て、また批判を行うことよってなされる。このような行動様式は、部分的には思考・分析優位の活動という倫

理学が持つ固有の特性に依拠し、また部分的には多くの倫理学者の好む(というより、むしろ *modus operandi* な)ところである。倫理学の一分野である応用倫理学——そこには戦争倫理学や軍事倫理学もまた含まれ、当然ながら民間人保護の倫理も含まれる——が理論と実践の架橋を標榜する(というより、むしろそれが応用倫理学の存在意義であり、また存在理由でさらある)ならば、脇掛椅子に座って「紙の上で戦争を論じ、紙の上でしか通用しない議論」を展開する倫理学は意味がないのであろうか? 著者はそう思わない。紙の上でしかできない議論は、人間の知の形成と蓄積において必要不可欠である。それは紙の上で積み重ねることができの特権でもある。「正義」の概念やその基礎付けなくして、評者のいう、人間は「少しでも正しくありたい」ということについて、その「正しく」とは何かを規定することは不可能である。結局のところ、もし論者のいう「現場」が紙の上の議論をふまえていないような「現場」であるならば、その「現場」では行為者間の相互理解可能性が担保されず、時として空疎となり、また時として混乱してしまうおそれはなからうか。戦争と平和をめぐる倫理学が理論と実践の架橋を目指すことは、その存在意義と存在理由にかかわる。他の学問分野や領域専門家との協働において、倫理学者はその学問的特質上専門

とする事柄について分業を担い、紙の上（だけではなく、頭の中や、他者との議論）において戦争と平和にかかわる概念の整理を行うことにより、全体としての協働を実現していくことを責務とするだろう。ここに、学際研究におけるコーディネーター、ファシリテーターという倫理学者のひとつのありべき像を見ることができよう。

最後に、拙著の議論に対して真摯に向き合っていたいただき、建設的な批評を賜ることができた幸を、また、これまで著者が考え及ばなかった視点や論点についての指摘を賜ることができた幸を、改めて評者に感謝申し上げたい。これらを今後の研究につなげていくことこそが、評者からの激励と期待に対して著者が果たすべき責務であると確信している。